

潮騒通信

潮騒ジョブトレーニングセンター

Drugs and Alcohol Addiction Rehabilitation Center

一部 100円

どっかい生きてます!



潮騒ジョブトレーニングセンターで亡くなった仲間たちの遺骨を収める潮騒合葬墓が建立され、鹿嶋市郊外にある鹿嶋山地蔵院の共同墓地で送り盆の16日、僧侶5人の導きで開眼法要が営まれました。依存症の難しさを反映して、亡くなくても仲間の遺骨を家族が引き取らないケースが増えていることから、自前の墓づくりが進められていました。これで遺骨は無縁仏にならず、安心して永眠できることになりました(3ページに記事)。

2019

8

警察・市役所・当事者が 初めて同じテーブルに

第2回潮騒人間塾で講演した神学生の海東強と
栗原センター長▶



既報のように今年は、潮騒ジョブトレーニングセンター(JTC)の14周年フォーラムを10月20日(日)に開きます。企画の柱は午後のトークイベントです。初の取り組みとして司法・行政・福祉・教育など潮騒JTCに直接・間接にかかわりを持って頂いている地元関係者の参加を得て、それぞれの立場から潮騒について本音の意見を述べて頂けたら、と考えています。この企画を実現することで地元に根差す依存症の総合回復施設として皆様からの認知と信頼を得たい、というのが私たちの願いです。ぜひとも実のある議論を実現し、節目となる来年の15周年フォーラムにつなげようと、職員やスタッフが熱心に取り組んでいます。先頃、その準備段階とも言える鹿嶋警察署と鹿嶋市役所(健康福祉部)との初会合がありました。フォーラムへの出席はともかく、警察・行政・当事者が初めて同じテーブルに着くことができ、意義ある意見交換となりました。

私は常々、潮騒JTCと地域の社会資源や地域住民との関わりを強くしたい、入寮者が安心して回復に取り組めるための取り組みや、地域の方々がいつでも安心して相談に来られる施設づくりに尽力したい、と考えています。そのためには潮騒と関わりのある警察や行政、教育、地域の諸団体などとのネットワークが形成できればと思い、今回思い切って一歩踏み込む形でアプローチしました。その結果、今回の意見交換では、警察署より「国体・オリンピックを控えている中で、依存症者たちへの立ち直り支援に期待したい」などの意見を頂き、鹿嶋市側からは「アルコール依存症について、行政では対応できないことを担ってもらっている」「どんなプログラムを行っているか実際に見学したい」など前向きな意見を頂きました。これに対して、潮騒側からは「各地の行政からの相談が増えている。依存症は社会問題ととらえており、職員30人・当事者スタッフ12人の体制で入寮者を支援している。要は当事者を孤立させない対策が大事で、“ダメ。ゼッタイ。”運動だけではない啓発活動で協働を目指したい」と説明しました。

振り返ると、私が7度目の刑務所生活で生まれ変わることができたのは、出所直後に飲酒して大宮署に逮捕された時に、担当した検事さんが依存症に理解のある人で、「栗原、お前もいい年だ。刑務所との往復を終わりにするためにもダルクに行ったらどうだ」「お前が順調に回復できたら、いつか(埼玉県北部の)薬物汚染地区に施設をつくってくれ」と諭され、私を起訴猶予にしてくれたことがきっかけでした。あの時、検事さんが形式的に処理して私を起訴していたなら有罪となるのは目に見えており、まともや刑務所に逆戻りでした。そうした負の連鎖を断ち切ることができたのは、あの検事さんのお陰です。その温情に報いるためにも、「今度こそ回復して、いつしか自分の施設をつくろう」と誓ったのでした。その検事さんは私が鹿島ダルクに入寮してから折を見ては4度にわたり電話をくれ、最後には私が順調に回復している様子を知って、「よく頑張っているな」と電話の向こうで涙ぐんで喜んでくれました。ですから私は自分を引き合いに「どんな人でも生まれ変わる」と訴え続けます。(センター長 栗原 豊)

潮騒墓 完成 開眼法要



潮騒 JTC が地元の鹿嶋市に建立を進めていた仲間たちの終の棲家となる合葬墓が完成し、墓石に魂を入れる石塔開眼と亡くなった仲間たちの霊を供養する盂蘭盆会(うらばんえ)の法要が8月16日、菩提寺となっている同市志崎の高野山真言宗「鹿嶋山地蔵院」(根岸宏昭住職)で執り行われました。

午前10時から行われた法要には、栗原センター長や妻で女性ハウス「るみの家」の施設長・ルミさんを始め、同センターの職員やスタッフ、入寮者ら約60人が参列しました。本堂の最前列左にはテーブルの祭壇が設けられ、これまでに亡くなった仲間たちや関係者の遺骨14柱と亡くなった方々5人の遺影が飾られ、住職を含む5人の僧侶がお経をあげて法要が厳かに営まれました。読経が続く中、センター長の焼香に続いて参列した関係者や入寮者たちが次々に焼香をして手を合わせ、亡くなられた方々の霊に祈りを捧げました。

同院本堂の前に広がる墓地の一角に完成したお墓の大きさは高さ約2.5メートル、幅約2メートル。2区画分の墓所の中央に重さ約8トンの自然石が墓石として使われています。墓石の厚さは約1メートルで、正面に縦90センチ、横80センチの御影石が埋め込まれており、中央に大きく「愛」の文字が霞(かすみ)彫りされています。その下側には「潮騒ジョブトレーニングセンター」と横書きされた御影石が埋め添えられています。墓石の右手には、回復プログラムで使われている「平安の祈り」の言葉を彫った御影石でできた碑石が建ち、墓石の地下には縦横1.5メートル、深さ2メートルのコンク

リートで作られた遺骨を保管する納骨室が設けられています。

本堂で営まれた法要の後、センター長が遺骨の入った骨壺に亡くなった方々の名前を記し、墓石後方に設けられた納骨室の拝石を開けた入り口から墓石建立業者と潮騒の仲間たちの手で14柱が納骨されました。石塔開眼が始まると5人の僧侶が本堂から現れ、墓石の前で儀式に則って法要が執り行われ、読経が流れる中で墓石の周囲にお米と酒などがまかれました。

法要終了後、合葬墓の前に立った栗原センター長は「今日ここに念願のお墓が完成し、開眼の供養が行われました。これで皆さんたちも安心して過ごしてもらえと思っています」と参列者にあいさつ。センター長を先頭に職員、スタッフが代表で焼香を行い、魂の宿った合葬墓に静かに手を合わせました。

合葬墓に納骨された物故者は以下の通りです(入寮者名=死亡順、カッコ内はアノニマス名)。

▼麻生信雄(ノブ)さん ▼村田慶治(ヨシハル)さん ▼岡野敬(ポチ)さん ▼藤原正信(フジ)さん ▼江口剛志(センジー)さん ▼澁谷宜夫(シブヤ)さん ▼吉野庸男(ケイ)さん ▼若谷新一(シン)さん ▼村岡政治(ムラ)さん ▼白戸隆(シラト)さん ▼加藤真琴(カート)さん ▼光岡進(オカ)さん。

また同日に納骨された入寮者以外の関係者は以下の通りです(カッコ内は続柄)。

▼深井公子さん(入寮者・深井純司さんの母) ▼青木利雄さん(入寮者・青木利一さんの父)。



大和会納涼祭

潮騒エイサー隊が勇壮な演舞を披露

潮騒 JTC が入寮者に提供している回復プログラムの一つに沖縄県や鹿児島県奄美群島に伝わる伝統芸能のエイサーがあります。このプログラムに取り組んでいるのは男女混合編成の潮騒エイサー隊「鹿嶋琉球太鼓」。メンバーは男女合わせて 15 人で、今年は男性 2 人が新たに加わったものの女性 1 人が退寮で抜けたため、演舞メンバーも変わりました。エイサー隊のメンバーたちは時間をやり繰りしながら週 2 回の練習に汗を流すほか、千葉ダルク・エイサー隊の仲間たちと月 1 回の合同練習にも力を入れ、10 月に開催される潮騒 JTC 14 周年フォーラムに向けた準備を進めています。

同エイサー隊が誕生したのは約 6 年前。地元鹿嶋市や鹿行地区で行われるイベントにも参加し、保育園や介護施設への慰問などを通じて潮騒 JTC の存在意義や役割などを PR する活動に努めてきました。その結果、出演依頼も年々増えつつあり、まさに面目躍如(めんもくやくじょ)の大活躍中です。

特に今年は大きなイベントの出演があり、5 月の連休には行方市天王崎「コテラス」で行われたカラオケ大会に招かれ、6 月下旬にも行方市文化会館で開催された潮騒 JTC 音楽ケア・プログラムの講師を務める川島有紀さん主催の歌祭りステージに出演。千葉ダルク・エイサー隊との合同エイサーで勇壮な演舞を披露しました。7 月から 8 月に掛けては、保育園の夕涼み会や施設慰問のほか、いずれも台風で中止とはなりましたが、鹿嶋の海を盛り上げる野外音楽イベントや東京 2020 オリンピック・パラリンピックを盛り上げる大

会などから演舞要請が舞い込み、エイサー隊を率いるリーダーのヒトシさんはスケジュール調整に頭を悩ませるほどの忙しさに嬉しい悲鳴を上げていました。

8 月 2 日には、地元の不動産会社・大和ハウジング(鹿嶋市荒野)が主催する会員組織「大和会」の納涼祭に招かれ、日本舞踊の若樹会とともに潮騒 JTC のエイサー隊も出演しました。同社が所有する同市武井のコミュニティーハウス「なごみ館」前の広場には、午後 5 時半の開宴前から約 100 人の会員たちが三々五々集まり、夕涼みの夏祭りを楽しみながらエイサー隊の見事なパチさばきと勇壮な演舞に大きな拍手を送っていました。恒例の納涼祭には、潮騒 JTC からエイサーを踊る男女それぞれ 4 人のエイサー隊とサポート役の新人メンバー 1 人の計 5 人のほか、焼きそばの調理を依頼された農業隊 2 人も参加。元タレントのマーシー(田代まさし氏)も栗原豊センター長と原田雅也事務長とともに駆け付けました。

同社の飯島稔社長や関係者のあいさつが終ると、マーシーの司会で演舞がスタート。会場には長胴太鼓や締め太鼓、パーランクの音が響き渡り、エイサーの衣装に着飾ったメンバーたちが音楽に合わせて掛け声や指笛を吹きながらダイナミックな踊りを 4 曲披露。アンコールでは参加した会員たちと一緒に、沖縄音楽に合わせて手踊りするカチャーシーを踊って宴を盛り上げました。プログラムの最後は、同エイサー隊のメンバーたちも盆踊りの輪に加わり、地域の人たちと交流を深めました。参加した会員たちは「毎年エイサーを見るのを楽しみにしています」と笑顔で話していました。(岩)

めい “お客さん”の栗原センター長の目は厳しかった

私たち鹿嶋琉球太鼓は、先月から仕組みを変えたり、いろんな話し合いをプロジェクトチームでしたりと、少しずつ変わっている最中で、なごみ館でのエイサー演舞でも演目やメンバーのことで少し意見の食い違いがありました。

当日は蒸し暑く、夕方とはいってもうだるような暑さで、本番前から汗をかいてしまうほどでした。マーシーも司会として参加してくれ、面白おかしく進めてくれました。音響のトラブルはあったけれど、なんとかアンコールまで終わることができました。皆それぞれミスはあったものの楽しく出来ました。私も一生懸命やりました。でも、お客さんとして見ていた栗原センター長の目は厳しかったのです。翌日言われた言葉は「合っていない。バラバラ」でした。一番正しい意見だと思いました。

その日の午後、エイサーリーダーたちとDVDを見て、センター長の言葉に納得しました。それぞれは頑張っているけれど、合わせようとしていなかったのです。足の高さ、顔の向き、バチの方向がバラバラでした。大きな課題ができました。女性4人、ここから足並みそろえて練習しようと話しました。

この日の演舞で得たものは大きかったと思います。自己満足ではいけない。個人プレーではなくチームプレーであることを再認識させられました。今後のぶっちゃげ祭りや潮騒フォーラムに向けて、鹿嶋琉球太鼓として、女性グループ「なちゅ」として、一丸となって頑張りたいと思います。

あきら エイサー仲間と一緒に踊っている私が「好きだ!」

今年も、去年行ったなごみ館でのエイサー演舞に出掛けました。スタートは午後6時半でしたが、まだ蒸し暑く私たちエイサー仲間は汗だくでした。最初の曲は「ちきゅうきょうだい」でしたが、私はまだこの踊りを習得できていなかったのが旗持ち役をしました。一生懸命に大きな掛け声を出しました。その曲が終わり、私が踊る番が来て緊張の場面です。不安はぬぐえませんでした。馴染みの「ミルクムナリ」といった曲を踊り、間違えながらも最後まで踊り切りました。

次の曲は私の好きな踊りで、汗をかきながらも全力を尽くし踊り上げました。全部の曲を踊り切っていつも思うことは、踊っている自分が好きなこと。社会にいた時には、こんな気持ちになったことはありませんでした。

夢中にしてくれるものもない日々を過ごしていたけれど、今ではエイサー仲間と一緒に踊っている私を、「好きだ!」と気づくことができています。しかも私の息子もエイサーと一緒に踊っています。息子の踊りを見ながら、息子の成長を頼もしく思えて、とても楽しかった一日でした。

また来年も技量をステップアップして、なごみ館に踊りに行きたいと思います。エイサーを始めて約2年ですが、自分の回復につながっているという実感はもちろんですが、太鼓を叩いている時間の楽しさと喜びに気づいた一日でした。

くま 盆踊りにも加わり 納涼祭の雰囲気になじみだ?

毎年この時期に開かれているなごみ館での納涼祭エイサー参加は、私には今回が3回目でした。夕方から夜にかけての陽も落ちた時間ですが、外で体を動かしていると、あっという間に身体は火照って熱くなってきます。いつの間にかこの納涼祭の雰囲気になじんで、気持ちも朗らかになっていました。

踊れたスペースは決して広くありませんでしたが、屋外の会場には独特な開放感がありました。薄暗い空間の中で踊った(?)から、というわけではないのですが、自分自身が気をつけるべきはあくまで動きのことなど、すっかり頭の中から解き放っていた自分がいたことに気づかされ、後悔と反省の思いを持つこととなりました。

踊りながらする私の掛け声も、野外では、周りの空気の中でかき消されていくような感じがして、虚しくもありました。でも、この後の盆踊りにも加わらせて頂き、見よう見まねで踊りました。夏の納涼祭の雰囲気の中に、ほんの少しなじみだかな。

夜の薄暗闇の中でエイサーを踊ることなどめったにないことです。屋外独特の雰囲気の中で身体を動かす爽快(そうかい)感が味わえたことには感謝しています。でも、少し時間を経て、まだ、自分自身に足りないもの、欠けているもの、できないでいるものがたくさんあることが明らかになって、自己嫌悪や否定感に苛(さいな)まれている自分がいて、心が重苦しくなっていることも確かかなのです。

9月から毎週毎週、土曜日や日曜日に演舞するスケジュールが次々と入っています。8月の間にじっくりと良い充電をして、ここでも地道に自分自身のさまざまな部分を変化させていく努力をしていける自分であつたらいいけどな…と思います。

近藤恒夫さんメッセージ

失敗しても やり直せばいいじゃないか

第2回 獄中の窓から見た
雪の中のタンポポに涙した



裁判はヤク中にうそをつかせる場だ

今考えるとね、何がよかったって僕の場合、最初に医療につながったのがよかった。だって医療は基本的に優しいじゃないですか。優しいと、うそをつかなくてもいい。自分に素直に、正直になれる。だけど司法(警察)は厳しいでしょう。犯罪を取り締まるのが仕事だからそうなるんだろうけど、こっちは自分が罰せられないようにしようと、どんどん身構えてしまうよね。

向こうは尋問のプロだからね。厳しい取り調べが続くと、ついその場しのぎのうそをついてしまう。よく刑事もののテレビドラマであるでしょう。過酷な取り調べに容疑者が「もういいや、楽になるんなら…」って自白するシーン。やってないのに「やりました」って認めてしまう、冤罪(えんざい)事件だね。

まあ、ヤク中の場合は尿検査でやってるのがバレバレだから否認しようがないんだが、問題は裁判では例外なく「もう二度と薬物をやりません」と反省の弁を述べる。つまり裁判がヤク中の当事者に、うそをつかせる場になっているんだ。「もう私はクスリをやめられませんか」って正直に言えない。だから、いつまでたっても紋切型の反省弁・反省裁判から抜けきれない。

その点で言うとな、僕は先に医療につながっていたから、まだ幸せだった。家族が北海道立の精神保健福祉センターにひと足先に相談してたんで、僕が薬物依存症だと知らされていた。その3年後に俺は精神科病院に入院する訳だけど、そのころ(1970年代)は精神科の医療では集団療法というのが流行っていた。精神科病院で盛んに行われていて、医者やワーカーがファシリテーターになっていろんな問題を話し合う。そう、グループミーティングみたいなもんだな。

「やめられない」が回復のチャンスに

俺もその集団療法に参加して、自分が正直になって話すと、みんなうれしそうにいい顔になる。逆にうそをつくと、あんまりいい反応が出てこない。僕は、病院でそういう経験をしていた。

例えば、「もう二度としません、僕は自分の力でやめられます。あなた方とは違います」。よくそう言う人がいるだろう。初犯刑務所なんかに行くと、そういう人ばかりだよ。「こんなつらい所には二度と来るものか。もうこりごりだ…」って感じで、「皆さんはやめられないかもしれないが、俺はやめられます。二度とここ(刑務所)へは来ません!」と高らかに宣言するんだけど、依存症だから出所したらすぐに再犯してしまう。

だから何回も刑務所に行ってる人たちは分かっているんだよ。恐らく彼らは自力ではやめられないと思っている。そういう人たちにはミーティングが役に立つんです。

「僕は大丈夫ですから、みなさん頑張ってください」って、病院でもそうメッセージする人いるでしょう。「僕は皆さんとは違います。病院出たら早く社会復帰して、就職して、迷惑を掛けた人に埋め合わせをします」って言うんだけど、そういう人たちとは刑務所や病院でまた出会うんだな。

つまり薬物を「やめられます」という“うそ”を延々とつき続けて、もう自分でも、それが空疎なうそだと分かっちゃっている。だからヤク中は「もう俺やめられませんか」と言った時が回復のチャンスですよ。事実、僕は「(覚醒剤を)やめられます」と言っていた間は全然クスリが止まらなかったけど、「もうやめられませんか」と言った時に初めて止められたからね。あれって不思議ですね。

自分のことは棚上げにして他に理由付け

僕は警察に逮捕されてね、考えるわけ。「なんで俺は、こんな人生になったんだろう」って。でも、捕まっても、自分が悪いとはこれっぽっちも思わない。今回は運が悪かったんだ。すべてはクスリが悪いんだから、悪いクスリさえやめればいいんだ、クスリがなければいいんだ、こんなものがあるから悪いんだ、と。そんなことばかり考えていた。

自分のことは棚上げにして、他に理由付けして自分の問題には向き合おうとはしなかった。他に責任を押し付ける。これってヤク中の得意わざでしょ。俺も自己中心の考え方にすっかり染まっていた。

だから起訴されて過ごした札幌拘置所のなかでも、なかなか反省の気持ちなんて生まれなかった。僕は独りぼっちが苦手だったから、ひととき孤立感と孤独感にさいなまれた。おまけに覚醒剤の後遺症も出てきて、拘置所生活はとても苦しかったよ。

そんななかで、ふと陽が差す鉄格子の窓の外を見ると、11月下旬の北海道だから外は一面雪景色なんだけど、黄色いタンポポがひょっこり顔を出していたんだよね。それを見たら、理屈抜きになぜか自分が恥ずかしくなってね。雪にもめげずに花を咲かせているタンポポに比べたら、40歳にもなるのにクスリにおぼれて意味なく生きている俺って、何て情けない存在なんだ…。そう思ったら涙が止まらなくなかったんだ。

そうしたことが伏線になっていたのかもしれないけど、裁判の時に俺初めて自分以外の他者に「やめられませんか」と言えたんです。裁判では不思議なほど自分に正直になれた、本当に。それは本にも書いたんだが、当時、僕の裁判を担当した裁判官が奥田保さんという人で、後に弁護士になって僕の、ダルクの支援弁護人になってくれた人なんだけど、惜しくも2018年5月末に亡くなってしまった。

「私を刑務所にぶち込んでください」

で、最終陳述で奥田裁判官に向かって俺はこう述べたー。

「私は覚醒剤をやめるために、今日までさまざまな努力をしてきました。でも、すべて無駄でした。私の意志ではどうにもなりません。もう、疲れ果てました。どうか判決は実刑にして、私を刑務所にぶち込んでください。執行猶予はいりません」と。

涙が足元まで落ちたけど、言い終わった後はなぜか

重苦しさが消えて、気持ちがとても楽になっていた。自分でも不思議なほど、その言葉がストレートに出たんだけど、判決を出す奥田さんは相当悩んだと思う。

そして1980年11月26日に僕は奥田裁判官から「懲役1年2月、執行猶予4年」の判決を言い渡された。説諭と言うのかな、奥田さんは最後にこうも付け加えてくれてね。

「今度、あなたが覚醒剤を使い、捕まったら懲役5年です。新しく犯した罪の刑に加え、いま執行猶予にした刑も復活し、併せて服役することになるからです。5年といえば、現在小学1年生の児童が6年生になってしまうほどの長さです。ぜひ生き直し、新しく生まれ変わってください」

この説諭は僕には生きることに對する、掛け値なしにイノセンスな応援の言葉に思えた。ありがたかった。でも、依存症は涙で帳消しになるような甘い病気じゃない。無力を認めることと同時に、次は回復に向けて一緒に歩んでくれる人が必要なんです。

ロイさんの誘いでミーティングに参加

拘置所から出てしばらくしたある日、家族とは離れて一人暮らしをするために借りた、たった三畳の古いアパートで暮らし始めた12月下旬のある日、外は大雪だった。やはりヤク中だから夜になるとお尻がむずむずしてくるんです。覚醒剤への欲求が頭をもたげたサインなんだね。すると僕の頭に、過去の売人の電話番号がバーっと浮かぶんだ。ヤク中には電話番号が何よりも大事な宝なんだ。不思議なもので一度記憶した電話番号は、そう簡単には忘れない。

俺は大雪のなか、外にある電話ボックスに向かおうとした。当時は携帯電話なんてないからね。そしたらタイミングよく、車のクラクションを鳴らす人がいるんだよ。アル中の一風変わった外国人、神父のロイさんだった。「よろしかったらミーティング行きませんか、近藤さん!」。そう俺を誘うんだよ。こっちは「冗談じゃねえよ、こんな吹雪のなかなのに…」って迷惑顔だけど、自助グループ(AA)のミーティングに行こうと迎えに来てくれた。度々だからロイさんの誘いを俺は断れなかった。

ロイさんには以前に入院した精神科病院でもミーティングに誘われていたし、拘置所にも何度か面会に来てくれて、ビッグブック(AAの基本テキスト)も差し入れてくれていた。僕はその晩から8年間、一日も休まないでミーティングに通った。毎日だよ、自分でもよく続いたと思う。(次号に続く)

「オカ、仲間になってくれてありがとう」



「野球大好き人間」だった愛されキャラの“オカちゃん”逝くー。重度のアルコール依存症だったデイサービス「百寿」通所者の光岡進さん(68)が7月24日に亡くなり、同30日に鹿嶋市内の葬祭場で施設葬(お別れ会)が営まれました。曲折を経て潮騒に入寮したものの思うように回復プログラムに取り組みずに、人一倍トラブルメーカーのオカちゃんでしたが、潮騒JTCを終(つい)の棲家(すみか)と決め、仲間からは慕われた存在でした。残念ながらお別れ会には家族の参列は叶いませんでしたが、祭壇には遺影とともに彼が愛用した野球帽とバット、ボールが飾られ、大勢の仲間やスタッフ、支援職員に見送られて天国へと旅立ちました。

潮騒JTCにある過去の記録からすると、光岡さんは鹿児島県奄美大島生まれ。父親も重いアルコール依存症で、大酒しては近所に迷惑を掛け、母親に暴力を振るう光景を幼い頃から目にして育ったようです。こうした幼児体験があったことから人一倍、飲酒の怖さやアルコールへの憎しみを持ったと言えます。しかし、彼自身も成人すると仕事柄もあって飲酒するようになり、やがてアル

コール依存症を発症して、よくある世代連鎖の“くびき”からは生涯、抜け出せませんでした。

オカちゃんは高校時代は野球部に所属し、好きな野球に打ち込みました。卒業後は監督の紹介で大阪の大手電気メーカーに就職しましたが、同僚とのけんかが原因で退職。その後はとび職となり、21歳の時に当時まだ大学生だった妻と結婚、二子をもうけました。とびの技量が高まるに連れ、仕事上の付き合いから本格的に飲酒するようになり、妻や妻の実家から酒を控えるよう何度も注意されたようです。やがて離婚する事態になり、妻子に逃げられ孤独の身となってからは更にアルコールへの依存度が深まりました。やがて幻覚幻聴に見舞われ、とびの仕事も失いました。

その後は精神科病院を入退院するものの飲酒は止まらず、飲酒に絡む重大犯罪により6年間の服役後に大阪・西成や横浜・寿町での生活を繰り返します。しかし、福祉施設に馴染めずに2012(平成24)年に新宿区福祉事務所を通じて潮騒JTCに入寮。残念ながら潮騒でも飲酒は止まらずに、幾度となく仲間とのトラブルを起こしては潮騒への出入りを繰り返しました。本人は「なんとか孫の顔を見たい」と話していたが、家族とは没交渉となっていました。

「お別れ会」では百寿代表のマコトさんが司会を務め、彼の歩みや施設での生活の様子を振り返り、遺徳を偲びました。晩年は発症したがんが全身に転移し、発見時には末期がんの状態でした。本人の希望で入院治療はせず、余命をできる限り有意義に過ごしてもらおうと周囲が気配りしました。野球が大好きだったオカちゃんのために8月6日にはメモリアルな最後のソフトボール大会を予定し、彼に贈ろうと特注の野球帽を作りましたが、被ることは叶いませんでした。特別に親交の深かった仲間のあいさつに続き、最後に栗原センター長が「オカ、君は回復が難しかったけれど、仲間には優しくった。仲間になってくれてありがとう」と弔辞を述べ、お別れ会を閉じました。(潮)

■ 赤い羽根助成でデイクア3階に念願のエアコン整備

潮騒JTCのデイクア活動の拠点でもある潮騒アディクションビレッジ会館(鹿嶋市宮中)3階の多目的フロアにこのほど、最新式の大型エアコン3台が設置され、夏場も快適な環境が実現しました。今年は長引いた梅雨が明けると一気に夏本番の酷暑の日々となっただけに、入寮者たちは「これまでは夏場には、ここに来ることには抵抗感があったけれど、待ちに待ったエアコンが入ったので快適にプログラムに取り組んでいます」と一様に喜んでいました。

今回のエアコン整備事業は、今年も赤い羽根共同募金の恩恵を受けることができたことで実現したものです。平成30年度共同募金助成金(令和元年度実施事業分)の一般募金には、潮騒を含め計48施設・団体が選ばれました。同募金会側からは「年々募金額が減っている中、皆様からお預かりした大切な募金の助成の趣旨をきちんと生かせるようにお願いします」との助言を頂いています。なのでエアコンによる快適環境の実現でデイクア活動の充実はもとより、潮騒人間塾など幅広い企画や各種プログラムに取り組むことで、障害者ケアの霊的な部分での助成効果も期待できそうです。

栗原センター長は「今回の助成で、念願だったデイクア活動拠点にエアコンを設置できました。それでなくても日々の体調管理が難しい高齢者や困難な障害者が増えているので有難い限り。いつもながら赤い羽根共同募金の温かい善意には深く感謝しています」と感想。デイクア責任者のツカさんも「今や夏場の猛暑には扇風機に頼って、忍耐と根性だけでは乗り切れなくなっています。それだけに今回のエアコン設置は入寮者の生活や福祉の向上にもつながります」と喜んでいました。(潮)



■ みのわマックの集いで自分の10年に思いを馳せた

都合により掲載が遅れましたが、恒例の「みのわマック41周年記念感謝の集い」が先頃、都内で開かれ潮騒JTCの仲間と一緒に参加してきました。今回、施設長が前任の伊藤さんから成宮さんになんて変わっていて、去年亡くなった山本さん(バープ)のいない集いでした。

東京・荒川区内にミニ神父と仲間たちがアルコール依存症者回復のための施設「三ノ輪MAC」を開設してから41年目を迎え、この間多くの仲間たちが「飲まない生き方」を獲得してきました。今回も集いにはマックの卒業生や大勢の先ゆく仲間たちが集まり、盛り上がりました。

そこに集まった仲間は、同じ病気を持った仲間です。そして同じプログラムをしている仲間はみんな生き生きと輝いて見え、とても触発されました。とある仲間の毒の吐き方もなぜだか昔と変わらず、いやもっと力強くなっているのを感じて、こんな回復の仕方もあるのだと感じました。潮騒JTCに戻って自分もちょっと真似てみたいです。

どうも自分には故郷に戻ったという感覚で幼い自分が出てしまいましたが、そんなときも仲間はピシャリと突き放してくれ、仲間と共にプログラムを行うことを思い出させてくれました。言葉ではなく行動で示してくれることに、ハイパーパワーを感じます。そして今回、関連施設紹介で「潮騒JTC」の名を挙げてくれたことに仲間の支えを感じました。みのわ・山谷マック(ワンステップ)の同期の仲間も声を掛けてくれ、場所は違っても抱えている問題はそんなに大差無いんだな、とも思いました。

振り返ってみるとこの10年はあっという間でした。無我夢中で歩いてきて気がつく道ができていました。他よりも規模が大きくなったこともあって、潮騒JTCの運営は大変です。でも、ここにも仲間とプログラムがあります。それがきっと何よりの財産だと感じます。だから自分は潮騒JTCに導かれたのかな、と思います。この先も「今日一日」マイペースの歩みで。(スタッフ、トム)

受刑者からの手紙

自分自身を変えて新しい生き方を、の提言に励まされる

シゲさん、お手紙有難うございます。潮騒 JTC の皆さんも毎日元気で頑張っているとのことで安心していただけます。私の方は相変わらず元気ですので心配いりませんよ。6月30日のカラオケ発表会はいかがでしたか？潮騒にはたくさんの方がいるので、歌のうまい人がいると思いますが、シゲさん、いかがでしたか？何か賞をもらうことができたでしょうか？また、6月18日のソフトボールの試合(第4戦)は10対9 サヨナラ負けとのことですが残念でしたね。4連敗。今度は頑張ってくださいよ。

早いもので、私が当地に来て7月で1年になります。私の残刑も後1年を切ることになりました。私の満期日は来年の6月下旬ですが、このままいけば1年くらいあっという間に過ぎていくと思います。シゲさんはお堅い方だから、手紙の返事をすぐに書いてくれるので嬉しいですね。でも、大変だと思います。無理をしないでください。私の方は暇と時間があるので、つい手紙を書いてしまいます。シゲさんが言うように、自分自身を変えて新しい生き方をしていましようとのこと助言は、本当にうれしい限りです。夏本番ですが、どうか身体にはくれぐれも注意され、ご自愛ください。

(東京都 N・M)

いつか笑顔が満ちあふれるように 潮騒の皆さんと歩みたい

先日、刑務所で潮騒 JTC での身元引受人の申請をしました。あとは許可されるのを待つだけです。私の残刑も一年を切ったので、これからも無事故で頑張ります。もう刑務所生活は本当に懲り懲りで、何とか立ち直りたく二度とこのようなことで人生の時間を無駄にしたくありません。手紙とパンフレットを読ませて頂き、思ったことを少しだけ書かせて頂きます。

私もずっと覚醒剤を使い続け、どうすれば薬をやめられるかと悩み続けてきました。私も潮騒 JTC の皆さんのように一緒にクスリから足を洗うしかない、と強く思っています。一日も早くメンバーと認めて頂くためにも、焦らず、強く生きていきたいと思っています。いつか笑顔が満ちあふれるように、潮騒の皆さんと歩みを進めて行きたいです。

今回も絶対に仮釈放で出所するという気持ちが強くあり、こちらに入所してから栗原さんの潮騒 JTC できちんとプログラムを受けようと心から思っています。この先、保護観察所などからも調査があると思いますが、よろしく願い致します。潮騒の皆さんの健康と心の平安を心より祈念しております。

(神奈川県 K・Y)

春季運動会で皆さんがとても 輝いていたことを思い出す

暑さ増す肌にこたえる今日この頃ですが、いかがお過ごしでしょうか。潮騒パンフレット、数年に渡り有難うございます。このほど委員面接(本面接)2回目を終了し、残るは社会復帰を待つまでになりました。予定では8月のお盆ごろになるのでは、と思っております。M市の方に1カ月間生活しますので、その時ご報告させて頂きます。

真夏の話にはふさわしくないかもしれませんが、先に行われた潮騒 JTC 春季運動会での皆さんの姿がとても輝いていたことを思い出します。私たちも5月に運動会があり、準優勝でした。優勝チームとは1点差だったのですが、潮騒の運動会は点数勝負なのでしょうか？それにしても酷暑も厳しくなるばかりですので、くれぐれも皆さんお体には留意して下さい。数カ月後に会える日を楽しみにしております。

(岐阜県 T・A)

最近潮騒 JTC でもエアコン生活が当たり前になっていますが、真夏の猛暑の厳しい環境下で前向きに受刑生活を送る皆さんからの手紙にはハツとさせられます。施設という貴重な居場所で暮らす恩恵を自覚させる大事なコミュニケーション手段です。(潮)

先輩がダメだった時に身元引受人になって頂きたい

突然のぶしつけなお手紙で誠に恐縮です。私は現在、覚醒剤取締法違反の罪で2年の実刑を受け、当刑務所に収監されている者ですが、出所後の事についての相談があり、今回お手紙を差し上げた次第です。

私の刑の満期日は来年4月なのですが、今回は仮釈放をもらい、1日でも早く出所しようと思っているのですが、現在、身元引受人をお願いしているのが地元の先輩なのです。入所後、半年近く過ぎていのに身元引受人が許可にならず、現在も調整中となっています。なかなか良い方向に行かないのですが、その身元引受人の先輩から手紙が届き、「心配しないでもう少し待っててください」とのことでした。それが2月頃の話で、その後は何の進展もないまま時間が過ぎていきます。

そして出所まで1年を切り、このままでは仮釈をもらうことができないのではないかと心配しております。身元引受人の先輩がダメだった場合に、その先輩が変わって身元引受人になって頂けるのか、また薬物依存の事についての相談などもあり、手紙を差し上げました。何しろ今回が3回目の懲役で、しかも過去3回の懲役全てが覚醒剤事件で服役しているため、次は絶対にないようにと思っています。今後の事、出所後の事についてなどでも相談したいことがあります。ご多忙の中、恐縮ですがご返答を頂けますようお願い申し上げます。

(茨城県 F・Y)

農業経験者として潮騒で世話になれる日が来るよう願う

栗原センター長、シゲさん、潮騒にて生活中の皆様、お元気でしょうか。私は元気なことだけが取り柄ですから、毎日元気で生活をしております。梅雨時期には少し肌寒い日があったのですが、夏になると昨年の猛暑を彷彿(ほうふつ)とさせるほどです。塀の中での処遇も夏バージョンとなり、以前と比べれば幾分か涼しくなったのですが、昨年は私もここで初めての気温40度オーバーを体験しました。私的には暑さよりも寒い方が体には少しきつかったように思いますが、鍛えられたせいか、暑いも寒いも経験を済ませたので大丈夫かと思えます。

センター長、毎回毎回、潮騒通信を送って頂きありがとうございます。そしてシゲさん、私たちの文通がスタートして早いもので1年を過ぎましたね。いつも励ましの言葉と共にシゲさんが毎日毎日、潮騒の仲間達と頑張る様子がうかがえるお便りで、自分も本当に一日も早く皆さんの仲間になれたらと心から思っております。

話は少し旧聞に属しますが、先頃の潮騒通信に田植えの様子がありました。私も子供の頃に家業である農業を随分手伝ってきたので、昔の事を様々と思い出しております。潮騒の農業隊メンバーの方が何人で4町5反歩の大規模な田植えを済ませたのかは分かりませんが、機械化されたとは言っても農業とはそんな甘いものではなく、基本は人力が大切であることを熟知しています。

なので、農業経験者の私としては本当に少しでも早くジョブでお世話になれる日が来るよう、受刑生活も一日一日を大切に務めようと心がけて生活をしています。以前にも話しました通り、私が潮騒ジョブに身柄引き受けをお願いした時に、すぐさまジョブの方からは「身元引き受けOKです」の回答をもらったのですが、残念ながら関係機関からは調査、調整中のままで、私に対するジョブの身元引受人としての許可が出た告知がありません。私のような者には許可が出ないのかもしれませんが、腐らずに前向きに何とか頑張るしかありません。引き続き、ご指導のほどよろしくお願いします。

(群馬県 H・N)

しおさい俳壇

8月のお題

墓参り

選者 桐本石見

特選句

墓参り
なかなか行けずお父さん

チャコ

庶民が墓を持つ様になったのは江戸時代中頃と言われ、それまでは村外れなどに土葬したとも、また地位の高い人は仁徳天皇陵の様に巨大なものもあり、縄文時代から死者を弔う習慣があったと言われる。今では盆には多くの人が夏休みを兼ねて墓参りをするが、夫々の事情で帰れない人もある。単純な句ながら切哀の句です。

特選句

亡き母の
面影宿る盆の月

オギ

昔は月に兎など連想しましたが、盆の頃の月には灯籠の灯に思いを重ねて亡父母など想うし、異郷に住むと余計に故郷も懐かしい。月は四季に趣きがありますが、盆の月は格別に郷愁を誘います。しみじみした佳句です。

特選句

終着駅
そこより先の墓参り

あべ

終着駅は都会にもありますが、この詠には田舎の駅を彷彿します。新幹線、在来線を乗り継ぎ帰省するが、まだ車などで行かないと故郷に着かない。私の里の島根県もそうした集落が多く、如何にも田舎に帰省した思いになります。実感と共に山里や海の里を懐かしむ句です。

俳句へのいざない

第三回 和歌から連歌、発句、そして俳句が生まれた

先月では漢字、仏教、和歌などの歴史を勉強しましたが、今月は俳句の誕生について勉強してみたいと思います。

中国から仏教や漢詩が伝わり、日本には奈良時代に万葉集、平安時代に古今和歌集、鎌倉時代に新古今和歌集など編纂(へんさん)されましたが、室町時代に歌の後の七、七の部分を含めて、前の部分の五、七、五だけで意味を成すことが考えられ、発句と名付けられました。

そして五、七、五の句に対して何か応える感じで五、七、五の句を作りました。「雪ながら山もと霞む夕べかな」に対して「行く水遠く梅にほふ里」などで、これを連歌と名付けました。その内に連歌の五、七、五だけで意味をなす工夫がされ発句、俳諧として独立しました。

その頃の発句は和歌が優雅であるのに対し、低俗な駄洒落的な句で人を笑わすものでした。「月に柄をさしたらばよき団扇かな」(山崎宗鑑)などですが、それでは今の川柳に似て、人生や山河の趣を詠う句とは言えません。荒木田守武などは、もっと文学的に詠むべきと批判もしていました。「元日や神代のことも思はるる」(荒木田守武)などは前句と比べて時の移りを思う感慨があります。

江戸時代になり、松永貞徳、北村季吟、そして1678年松尾芭蕉が俳諧師となるに及んで、今日の俳句が生まれましたが、その頃も発句、俳諧と言われ、俳句と言うのは正岡子規が明治の中頃名付けました。

まとめますと、今回は和歌から連歌、発句、俳句となったことを学びました。

今月の秀逸句

墓見せに子連れ孫連れ古里へ

あべ

今では田舎も共同墓地が多いが、昔は家毎に墓地があつた。その田舎を出て都会で定年を迎えたりすると、孫にも田舎や墓も見せたいと帰省する。集団就職した頃を思い、また歳月を顧みる句です。

今は亡き我が子を思ふ墓参かな

アオ

仏語に逆縁があり、本来は精進して仏縁になるが悪事をして仏縁に早く繋がることを言う。また老いた者から死ぬのが自然の道理だが、子が先に亡くなることも多い。新聞などでも子供の事故が報道されるが切ない。

塀の中行くに行かれぬ墓参り

キラ

この塀は刑務所の塀かも。人間は万物の霊長と言われるが、人間社会の中に戦争や犯罪、そして刑があるのは哀しいことです。それ故宗教や聖書もありますが、この詠もまた悲しく人間とは何かと思う句です。

親不孝詫びる思いの墓参り

ヨイチ

「何時までもあると思うな親と金」の謂れがありますが、作者も年を重ね亡くなった親に若い日の過ちを詫びる気持ちになった、それ

だけでも快方へ向かう願れかも。泉下(せんか、※あの世)の親も喜ばれる思いの句です。

新しき生き方告ぐる墓参り

シゲ

御父母の墓参か。今まで苦勞や心配を掛けたが、ようやくに新しい健全な生き方を見付けた、墓参りをしてその決心を告げる。研鑽を祈る句でもあります。

一度は行きたし里の墓参り

パロパロ

僧、月性の詩に「男児志を立て郷関を出づ：人間(じんかん)に到る処青山あり：」があります。現代社会に於いても故郷へは帰れない人が多い。しかし一度は墓参りをし、故郷も見たい。切実な実感の句です。

※月性(げつしょう)：幕末の勤皇僧。周防国(山口県)の遠崎村、妙園寺の住職。

父いまだ帰らざる沖胡瓜馬

ゆたか

盆には精霊馬(しょうりょううま)と言う胡瓜(きゅうり)や茄子(なす)を供えるが、胡瓜馬は走るのが早く精霊に早く来て欲しい意図、茄子馬は遅いのでゆっくり帰って欲しい思い。作者の父は戦死と聞くが、まだ遺骨が帰らないのかも。鹿島灘の沖を眺めながら、胡瓜馬に父恋の思いを託す句です。

佳作

回復を心に誓ふ墓参り	のん	墓参り果たせで心苦しめる	マコ
幾年や父母思ふ墓参り	ジェイ	帰省してすぐ手を合わす父母の墓	レモン
お盆には父母を迎えに墓参り	いるか	同行も減って故郷の墓参り	オノ
幾代の親にも感謝墓参り	あさ	文字なぞる墓の熱きに水を浴ぶ	一郎
子供等と親を迎えに墓参り	あつちやん	手を合わす鹿島の地から墓参り	コバ
手を合せ母を愛しむ墓参り	あきら	この墓に己が入るるかも知れぬ	ブッチ
秋深みゆく身ほとりの草も樹も	イチ	墓参り無沙汰の人と顔合わす	ヒロ
母の手をつなぎて里の墓参り	ミニー	幾年や花沢山に墓参り	ツカ
今年また父母の墓前に涙する	ゆうこ	墓参りこの世の憂さを呟きぬ	くま
母の思いまだ返せで墓参り	あべ	亡き母に思い巡らす墓参り	れいこ

どっこい

私も生きてます～我が回復記～ 「アル中のシゲ」の巻

第14回

トイレで血を吐きながらも酒を飲み続ける異常な私

吐血しても酒を飲み続ける私でしたが、「シゲ、出て来い!」と誰かが叫んでいます。もちろん幻覚なのですが、ホテル近くの公園に行くときすべり台の前に白装束を着た、髪の毛が濡れている長い髪の女性が私に手招きをしています。女性の首にはプラカードがぶら下がり、そこには「シゲ、役立たずのお前は地獄に落ちろ!」と書かれています。私は女性の首を押さえつけるのですが、その女性はただ笑っているだけ、「ネズミ、妖怪、そして今度は幽霊か…」私の狂気は頂点に達していました。身も心もボロボロになり、つくづくアルコール依存症の恐ろしさが身に染みるようになりながらも、まだ“底つき”には至りません。

そこまでいっても、「もう酒をやめよう」「二度と飲むまい」とはならないのです。アル中の悲しい性(さが)と言うべきか、「もうどうなってもいい」とやけっぱちです。今までのように足がコンビニに向かいます。すかさずカゴを持ち、酒類コーナーに立ち止まり、なりふりかまわずにビール、チューハイ、ウイスキー…を手当たり次第カゴに入れます。そしてレジでお金を支払い、酒類がぎっしり詰まったレジ袋を下げ、例の公園に向かいます。飲み始めると同時に、幻聴が聞こえ、幻覚が現れます。その恐怖から逃れるため、次々と酒を飲み干す行動の繰り返しです。周りには人が行き来し、冷めた目で私を見ている。何しろ吐血しながら酒を飲んでいるのですから…。私は紛れもない「アル中」であり、アルコールがないといられない廃人でした。

もはや飲んでも「酔い」などなく、気持ちが悪くなるばかりです。公園のトイレに駆け込む時でさえ、酒を持っていた状態です。予想通り吐血が始まりました。それでも便器に座り、持ってきた酒を飲み続け、「あー、うまいなあ。こんなにいいものは他にはない…」と、自分にうそぶきます。そう思い込むしかない悪魔の所業です。吐血しながらも狂った頭で、根拠のない満足感を味わっていました。「このまま死んでもいい…。」トイレの便器で血を吐きながらも、4～5時間も閉じこもっている異常さでした。

トイレの扉を開けて表に出る際、顔を上げて固定されている鏡のなかに写った私の姿には、洋服(シャツ、ズボン)のあちこちに血が付いています。でも、病院に行こうとはなりません。手を洗い、口をゆすぎ、これからどうするかを考えると、「そうだ、たまには居酒屋でも行くか」となります。既にコンビニで買った酒類は全部飲み干しています。居酒屋に着き、まずは生ビール中を頼むと店員が当たり前のように「おつまみはいかがですか?」と聞きます。私は「つまみはいらない」と断ります。遠慮からではなく、私の体が固形物を一切受け付けないからです。そんな私も、やがて病院への入退院をくり返し、やがて潮騒ジョブトレーニングセンターに入寮することになります。

アルコールで壊れた頭とはいえ、私は今もこうして潮騒 JTC で命をつなぐことができています。私は決して良い回復(途上)者ではありませんが、大なり小なり私と同じような体験をしている仲間たちと日々、依存症の回復を願いながら「今日一日」新しい生き方を模索しています。次回(最終回)は、私の回復記を総括して本連載を閉じます。

(次号に続く)

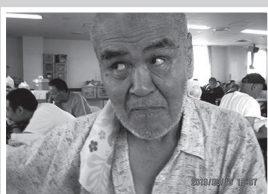
8月のバースデー

ユキ



まだ生きてます!

モト



100才までいきるぞお!!

セイジ



どっこい生きてます。

ヨコ

これからが
人生の始まりです。

8月の行事

- 8月2日 大和ハウジングなごみ館(エイサー演舞)
 8月8日 潮騒俳句会
 8月10日 潮騒人間塾(第3回)
 8月11・17日 秋元病院メッセージ
 8月25日 潮騒家族会
 千葉ダルクとのエイサー合同練習

9月の行事予定

- 9月12日 潮騒俳句会
 9月8・14日 秋元病院メッセージ
 9月22日 潮騒家族会
 9月29日 潮騒アディクションセミナー

献金・献品を頂いた方
(8月15日現在)

- ・武藤 クニ子 様
- ・石綿 茂子 様
- ・岡部 成美 様
- ・高田 武義 様
- ・有限会社 柴田工作所 様
- ・村上 様
- ・内堀 高良 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解のほどをお願いします。

編集後記という名の独り言

本号でも記事になっているように、念願だった潮騒 JTC 専用の墓ができた。これにより潮騒で亡くなった仲間のうち、事情があって家族の元に引き取られなかった遺骨も、ここで安心して永眠できる。つくづく潮騒(というより栗原センター長)の仲間を思う気持ちと運営手腕には頭が下がる。かつて英国の社会福祉政策を「ゆりかごから墓場まで」と評したけれど、潮騒の子供食堂ができれば、これに近い形を独力で実現するのではないか ▼今回お盆墓送り日に、潮騒墓の開眼法要に先立って墓所のある地藏院本堂で、5人もの僧侶が参列して盂蘭盆会(うらばんえ)供養も行われた。その際、仲間の遺影と遺骨とともに、栗原センター長が自分の父親の遺影と位牌を焼香台わきに配置し、手を合わせていたのが印象的だった。家族の元に戻れなかった遺骨と、センター長の父親(家族)への思慕と追悼が同在するのも潮騒らしい ▼周知のように、まだ幼かったセンター長には若くして南方戦線で戦死した父親の記憶はなく、もちろん遺骨もない。常々センター長は「潮騒の仲間は家族だ」と述べるが、法要に臨んだセンター長の慰霊行動に、僕はその意味を見たような気がする。そこには血や肉、骨を超えた霊的で宇宙的なビジョンで依存症と死をとらえる視線がうかがえる ▼栗原センター長は「私も妻も父親も、仲間たちも一緒に墓に入り、あの世でみんなミーティングをやろう。回復プログラムが教える自己改善に終わりはない。永遠に続く精神のリレーだ」と説く。まだまだ巷(ちまた)では死者本人よりも遺族の見栄のためと思わせる派手な葬式が多いが、これからは人口減もあり墓終いや家族、友人葬が増えるだろう。本当に悲しんでくれる人たちと心のこもった形でやりたい、という流れは不可避に思える▼その意味で潮騒葬(お別れ会)はとてもいいと思う。親しかった仲間がそれぞれ故人の思い出を語り合う。虚飾を排して本音で故人を悼む姿は、アディクトの最期を締め括るにふさわしい。潮騒葬では仲間の死が貴重な命(魂)のリレーとなっているのだ。つまり潮騒では一人として無駄な死などないのだ ▼アディクト(依存症者)の死は仲間の回復にとって反面教師として生かされるという、不思議な精神のリレー(循環)は、他の障害分野には見られない優れた人間観だと思う。病気が深ければ深いほど、回復のルールにのれずに苦しんだ仲間の死こそ尊い、という逆説は、もしかしたら親鸞の教えにつながるように思う。(市)



潮騒通信 どっこい生きてます! 2019年8月

Contents

- P② 警察・市役所・当事者が初めて同じテーブルに
 P③ 潮騒墓完成・開眼法要
 P④ 大和会納涼祭
 P⑥ 近藤恒夫さんメッセージ「失敗してもやり直せばいいじゃないか」
 第2回：獄中の窓から見た雪の中のタンポポに涙した
 P⑧ 「オカ、仲間になってくれてありがとう」
 P⑨ ・赤い羽根助成でデイケア3階に念願のエアコン整備
 ・みのわマックの集いで自分の10年に思いを馳せた
 P⑩ 受刑者からの手紙
 P⑫ しおさい俳壇 8月のお題「墓参り」
 P⑭ どっこい私も生きてます「アル中のシゲ回復記」/ 8月のパースデイ
 P⑮ 行事予定 / 編集後記 / 献金・献品 / 目次

■ 編集・発行:

特定非営利活動法人
 潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
 〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
 〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091
 潮騒アディクションビレッジ会館
 (潮騒アディクション・ケアセンター)
 〒314-0031 茨城県鹿嶋市宮中 4-4-5
TEL:0299-95-9991 FAX:0299-95-9992

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>



潮騒地域清掃活動

潮騒JTCでは地域ボランティアとして、定期的に近所の道路の清掃活動に取り組んでいます。猛暑の中、汗だくになりながら仲間たちが約1時間、約1.7kmの道路のゴミ拾いしました。空き缶、タバコの吸い殻、発泡スチロールの箱や紙くずなどを拾い集め、過去には依存行為を繰り返していたパチンコ店の前の道路も見違えるほどきれいになりました。

